The Structure and Meaning of Tag Questions: A Cognitive Linguistic Approach

メタデータ	言語: English
	出版者:
	公開日: 2017-10-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 中谷, 博美, Nakatani, Hiromi
	メールアドレス:
	所属: 金沢大学, 金沢大学, 金沢大学
URL	http://hdl.handle.net/2297/48124

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

The Structure and Meaning of Tag Questions: A Cognitive Linguistic Approach

付加疑問文の構造と意味—語用論・認知言語学的アプローチ—

論文要約

本論文は、すべての付加疑問文に共通する動機づけ、つまり、付加疑問文を用いる際のヒトの認知を新たに提案することを目的としている。英語の付加疑問文は、平叙文に照応して yes-no 疑問形式(付加部)が加えられ、話し手が聞き手に命題内容を確認する、あるいは、同意を求める機能を持つものとされている。しかし、この一般化では、次のような例：*I do not want a repeat of what happened at Shaftesbury Avenue, do you?*（付加部の主語は、前文の主語と照応するはずであるが、照応せずに変化しているもの）を捉えられない。先行研究では、意味機能については用法の列挙に終始し、構造に関しては規則の提示に留まっており、用法間の関係や構造の変化を伴う事例に説明を与えていない。ここでは、実際の使用例を認知文法の最新理論(Current Discourse Space(CDS)と Anchoring Structure)に基づいて分析し、なぜ多様な意味機能と形式を持つのか、何が構造に変化を生じさせるのかを明らかにする。結論として、すべて付加疑問文は、話し手と聞き手の認識が一致することに動機づけられて発話されるとした。さらに、命題に対する間主観的(話し手と聞き手が互いに共有する)認識を付加部で調整できるため、談話をコントロールする機能を、構造の変化を伴って獲得してきたと考察する。認知言語学の観点から、意味機能と構造を連続的なものとして捉えることにより、これまで明らかにされてこなかった付加疑問文一般の本質に迫る。

第一章では、付加疑問文を概観し、論文全体の主旨を示す。英語の会話を聞くと、文の末尾には様々な表現がある。例えば、*you know, I think* といった談話標識や、*isn't it?* のような疑問文、あるいは *right?* のような語彙などが頻繁に聞こえてくる。これらの表現の中で、付加疑問文は、英語に特徴的であると言える。他の言語では、*n'est-ce pas?*(フランス語)や *nicht wahr?*(ドイツ語)など決まった形式をともなうことが多い。しかし、英語では[助動詞＋極性＋代名詞]の形式が前置される命題に照応して、数限りない組み合わせを持つ。本論文は、このように複雑な構造を持つ付加疑問文を研究対象とし、その特徴である構造と意味機能がどのように関わり合っているのかを認知文法の枠組みから明らかにしようとするものである。

付加疑問文は、命題に照応した主語と助動詞を伴って、(1)のように上昇調で命題の真偽を聞き手に確認しようとするもの、(2)のように下降調で聞き手に命題に同意することを求めるものがある。

(1) The answer is twenty, isn't it? (rising tone = Am I right?)
(2) The view is magnificent, isn't it? (falling tone= I'm sure you agree)

(Wells 2006)

しかしながら、このような定義では説明できない例が実際には多くある。例えば、映画 Harry Potter シリーズは、全 8 作品でおよそ 1180 分であり、171 例の付加疑問文が観察されるが、そのうち 48 例は、この定義には当てはまらない。いくつか以下に例をあげる。

(3) Brilliant, isn't he?
(4) Feels strange to be going home, doesn't it?
(5) I'll bet you loved that, didn't you, Potter?
(6) Tragic of course, to lose one's family; never whole again, are we?

例えば(4)の例には付加部の前の文に主語がなく、(3)の例は、主語と動詞がない。また、(5)の例は補文に照応している。(6)の例は、照応する文に予測さえもつかない。さらに、発話された文脈を追ってみると、単に確認をするか同意を要求するという 2 つの機能だけでは説明できない例がある。

RON: Those weasels! Never told me about any Marauder's Map!
HERMIONE: But Harry isn't going to keep it. (7) He's going to turn it over to Professor Mcgonagall, aren't you?
RON: Oh, sure. Along with his invisibility cloak?
(*Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*: 2004)

(7)の例は、2 人の人物が共通の友人について話している場面である。話し手(Hermione)は、聞き手(Ron)に対して、Harry が先生に借りた魔法の地図を返すことを要求している。ここでは、聞き手(Ron)にも魔法の地図について責任があることを示唆している。この例は、命題の主語(*he*)と付加部の主語(*you*)が一致しておらず、また、確認するというだけではなく、命題が行われることを要求し、かつ、そのことについて答えさせようとしている。このような一見、非文であると思われると同時に話し手の気持ちをよく表している例は、どのように説明されうるのだろうか。

第二章では、先行研究とその問題点について論じる。付加疑問文については、構造を解き明かそうと統語論がさかんに議論されてきたが、その複雑さゆえに機能を捉えようとする語用論に中心的議論が移ってきた歴史がある。中でも、様々な側面を統一的に捉えようと試みた研究を議論の中心とする。統語的側面を認知意味論の観点から研究した Nakau(1994)、語用論の観点からその意味を独自の公式によって表した Wierzbicka(2006)である。

Nakau(1994)では、付加疑問文の照応原理を「付加疑問文（の主語と動詞）は、主文全体命題の主語と動詞に照応する」とし、これまでに説明が不可能であった以下のような例を説明しようとした。

(8) a. I always told you that I was a bit mad, {didn't I? /*wasn't I?}
b. I think Tom likes foreign beers, {*don't I?/ doesn't he?}
(Nakau 1994: 166)

(8a)では、付加部は *I told* に照応しているのに対して、(8b)では *Tom likes* に照応している。この不一致の説明として、(8b)の *I think* はモダリティ要素であり、全体命題ではないために、付加部がこれと一致しないとしている。意味的観点から、付加部がモダリティには一致しないという定義により、補文に照応する例を説明している。しかしながら、先に挙げた例の中で、この原理により説明できるのは、(5)のみであり、そのほかの例は説明できない。

Wierzbicka(2006)は、付加疑問文を以下のような公式で捉え、すべての例に当てはまるとした。

S, [opposite-polarity tag]?

(a) I say: S

(b) I think you would say the same

(c) I know: you may not want to say the same

(d) I want you to say if you would say the same

(e) I think you will say you would say the same

(9) Maria is Italian, isn't she?

(10) Maria is very nice, isn't she?

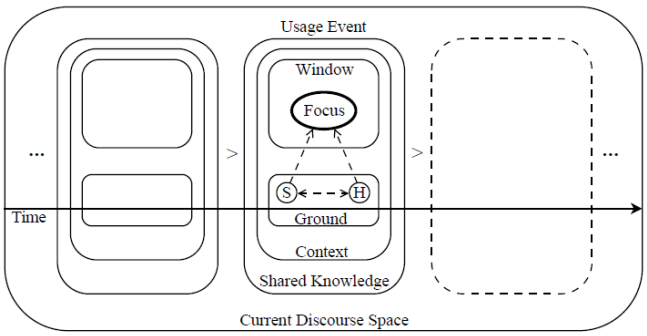
(11) Randolph got enough books to start a public library, haven't you, Mr. Randolph?

(Wierzbicka2006: 255-256)

ここで挙げられている 3 つの例は、付加疑問文の重要なパターンを表しており、また、その公式は付加疑問文の持つ特徴を確実に捉えていると思われる。(9)は事実の確認、(10)は意見の一致を表す例であり、(11)は、ここで議論の対象としている非照応関係にある例である。しかしながら、この公式からは、なぜ(11)のような構造が現れるのか、また、どのような機能と結びついているのかといったことについては触れられていない。

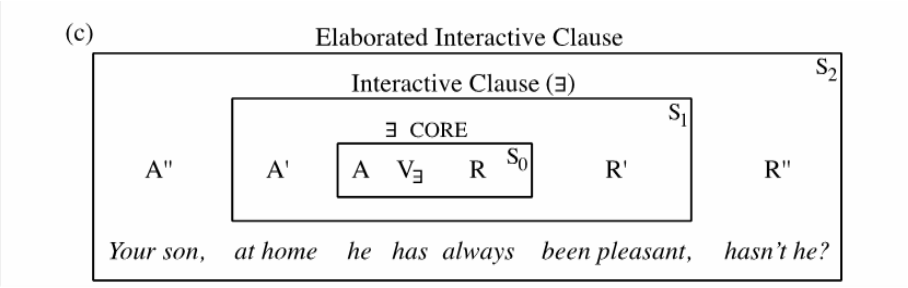
以上のことから、先行研究で扱われていない問題点のうち、①非照応関係にある構造の理論的説明、②構造と機能の結びつきの 2 点をとりあげる。①については、Langacker の認知文法の枠組みのうち、最も新しいものの一つである Anchoring Structure を導入することにより説明を試みる。また、②については、同じく Langacker の認知文法の枠組みのうち、談話の認知的分析を可能にする CDS(現行談話スペース)を用いて図で表すことにより示す。

第三章では、関連する認知言語学における基本概念を提示した。Langacker の提唱する認知文法は、言語には人の認知が反映しているという観点から文法を捉えるものである。CDS、Anchoring Structure の順にその概念を提示する。CDS は、談話に含まれるすべての要素を図で示すためのものである。談話の流れの中で、発話時に何がベースとなっている(含まれている)のか、何がプロファイルされているのかを図示することができる。以下の図が CDS である。



(Langacker 2012)

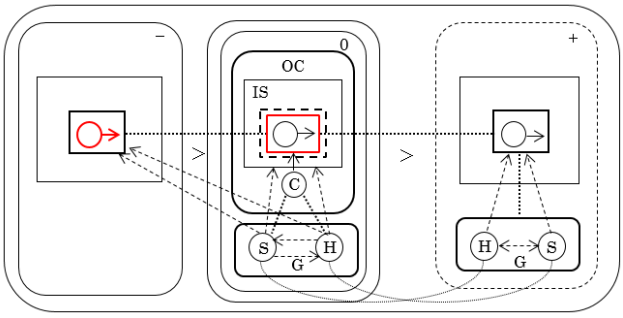
次に、Anchoring Structure とは、節が形成される際(統語的側面)の認知を示すものである。構造を機能で示すことで、層構造(Layering)と線的連続(Anchoring)の認知的動機づけを明らかにしている。Anchor(出発点) 「起こったかどうか CORE」を elaborate する Remainder(精緻化する要素)という A∃R の線的連続が層を成している。そのことを示したのが、次の図である。



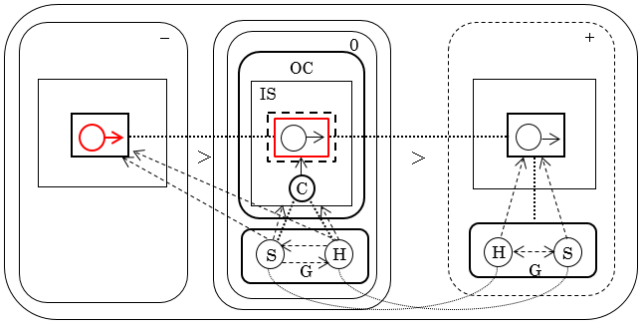
(Langacker 2015)

第四章では認知言語学、第五章では語用論の概念とのかかわりを実際の事例に基づいて議論した。ここでは第三章で示したの 2 つの概念により、付加疑問文の意味機能には、2 つのレベルがあり、そのことが非照応構造を可能にしていること、付加疑問文は、1 つの文と 2 つの文が連続をなす構造を持つことを主張している。つまり、問題点②は、2 つのレベルが、それぞれ何が話し手と聞き手のやりとりの中心となっているかが異なるということにより説明できる。情報レベルでは、命題の存在自体が問題となっているのに対して、談話レベルでは存在はもはや問題ではなく、話し手と聞き手のやり取り自体が中心となっている。問題点①は、付加疑問文の構造が 1 つの文と 2 つの文が連続をなしているため、結びつきの弱い構造が存在し、それゆえ、拡張的な事例が多く存在すると説明できる。

まず、問題点②の 2 つのレベルを表す図を以下に示す。2 つの図の違いは、IS(オンステージ)の範囲の違いである。レベル A(情報レベル)では、命題(○と→)の外枠(存在)だけが IS の中にある。一方レベル B（談話レベル）では、それに加えて概念化者(C)が IS の中にある。つまり、問題となるのが、命題ではなく命題であると思っている主体となる。この C が聞き手と一致すれば、付加部の主語が *you* となる非照応が説明できると考える。非照応の例で多く現れる要素が *I, you, we, it* であることも、この図から説明できる。

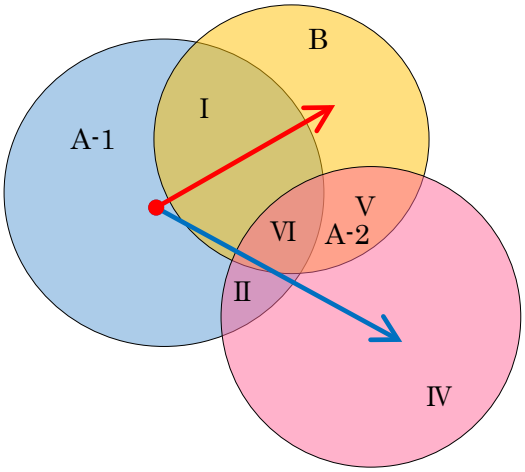


The CDS of A level Tag Questions (author)



The CDS of B level Tag Questions (author)

この図をもとに、事例分析を試みた結果を示す。結果をまとめたのが以下の図である。データとして用いたのは、Shakespeare 全戯曲と Harry Potter 全シリーズのおよそ 300 の事例である。付加疑問文の 2 つのレベルにより、これまでに研究されてきた機能が整理され、また、その構造との関連性が示された。



Categories

A-1: Information Seeking

A-2: Agreement Seeking

B: Discourse Management

Structural Patterns

Ⅰ: Word + Tag

Ⅱ: Subjectless Clause + Tag

Ⅳ: Main Clause + Complement + Tag (anaphoric)

Ⅴ: Main Clause + Complement + Tag (non-anaphoric)

Ⅵ: Clause + Tag (non-anaphoric)

The Relationship of Categories and Structural Patterns (author)

次に、問題点①の連続である証拠として、連続の中間にあることを表す図を以下に示す。BNC の 4000 の事例のうち、非照応関係にある例を取り上げる。これらの特徴は、(12)や(13)のように A'(緑色部分)が付加部にあることである。通常、A'は、文の先頭に現れる。なぜなら、A(出発点)のさらに外にある要素と定義されるからである。A'には、認識されやすい目立つ要素であるという側面と文の役割を決定する重要な要素であるという側面がある。この文の役割を決定するという側面のために、SAI(Subject-Auxiliary Inversion)は、常に A'がある。付加疑問文は、その構造の中に SAI を伴っており、通常、文の先頭に位置する A' がカンマイントネーションで区切られて文末に位置節の先頭かつ文末であるという二重構造がこのような弱い結びつきの構造を可能にしている。

(12) Amazing, isn't it?

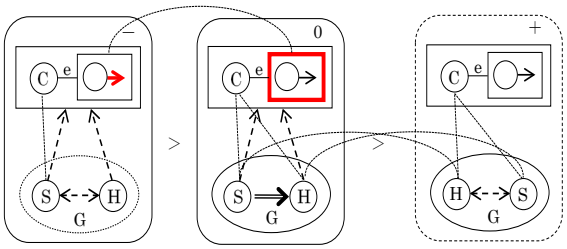
Elaborated Interactive Clause		
A'' / Interactive Clause	Interactive Clause / R''	
R'	A' / ∃CORE	
	A / V∋	R
Amazing,	*isn't*	*it?*

(13) Martin was just leaving when Stephen rang, weren't you?

Elaborated Interactive Clause				
Interactive Clause / A''			R''/ Interactive Clause	
A' / ∃CORE		R'	A' / ∃CORE	
A	V∋		A / V∋	R
Martin	*was*	*just leaving when Stephen rang,*	*weren't*	*you?*

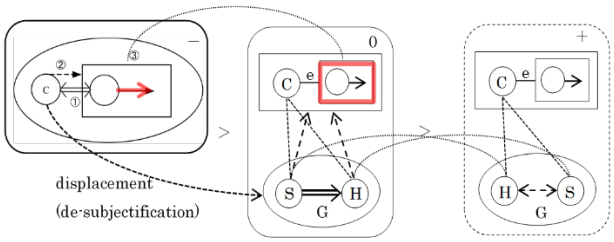
第六章では、他言語への応用として、日本語の終助詞と付加疑問文を取り上げる。これら 2 つには類似点と相違点があり、それを以下の図で示すことができると提案する。構造が最も類似している例を図示する。その語順と構造については、平行的に捉えられるが、intersubjectivity の現れ方において以下の(14)と(15)にしめすような相違点がある。

(14) Cold, isn't it?



The Construal Configuration of Extended Types (author)

(15) 寒いね。



The Construal Configuration of Ending Particles (author)

日本語は、intersubjectivity をその構造の中に含まない。終助詞のように明示化するやり方もあるが、それが常に含まれる必要はない。英語は構造自体に intersubjectivity が含まれており、それゆえ、例えば「寒い」は文として成立するが“Cold”だけでは文が成立しない。このように類似構造を見ることにより、その差異がより明確に浮かび上がる。

第七章では全体のまとめを示している。結論として、付加疑問文の構造は、2 つの文の中間にあり、連続を成している。そのため、非照応関係にある拡張的な例が見られる。また、その機能には、2 つのレベルがあり、話し手が聞き手に対して何をやり取りの中心としたいかということがレベルの差を生んでいる。これらの事実により、付加疑問文の構造と意味のつながりを示すものは intersubjectivity であると考察する。2 つの文の中間(二重構造)も機能の 2 つのレベルも、intersubjectivity という 1 つの概念によって統一的に説明されうる。A'は、これら 2 つの付加疑問文の特徴が 1 つの intersubjectivity によって表されるということを示している。Verhagen(2005)のいう 2 つの intersubjectivity は、Langacker の認知文法の枠組みにより、統一的に示すことができるのである。